

# 「保育ゼミナールⅠ」実践報告(2)

木戸 久二子・高岡 光江・神谷 かつ江・内田 恵美子・生島 嘉人・浅野 秀男  
(東海学院大学短期大学部)

## 要 約

本稿は、東海学院大学短期大学部幼児教育学科の卒業必修科目である「保育ゼミナールⅠ」の、令和3年度(2021)における実践報告である。

キーワード：幼児教育，保育，ゼミナール，医療，心理，音楽，スポーツ，造形

## はじめに

東海学院大学短期大学部幼児教育学科では、平成31年度(2019)から開設された教職再課程認定及び保育士養成課程の改正に合わせ、専門教育科目に「保育ゼミナールⅠ」「保育ゼミナールⅡ」の二つの卒業必修科目を新設した。どちらも演習の1単位科目で、Ⅰは1年次、Ⅱは2年次での履修とした。「授業の目的・到達目標」にはディプロマ・ポリシーを当て、「授業概要」は以下のとおりである。

学科が目指す人材の育成のために様々な環境を提供し、実践的力を有する保育者としての資質の形成を目指す。教育・保育現場や地域における実践活動の見学と参加、研究発表会の計画・準備を経ての実践等に主体的に取り組み、子どもたちと実際に関わる中で、幼児教育・保育に対する関心と意欲を高め、自己の専門性について考える。

本学科では、ほぼ全員の学生が幼稚園教諭免許状及び保育士資格を取得して卒業後は保育職に就いている。専門教育科目のカリキュラム上の特色として、医療・心理、音楽、スポーツ、造形の「学びの柱」について学修する科目を保育士資格の選択必修科目上に設定し、学生それぞれが興味のある分野、得意分野の学びを深めることによって専門性を持った保育者の育成につなげていくことを目指している。

「保育ゼミナールⅠ」では前期の終わりに第1回目の授業でオリエンテーションの時間を設け、各柱の担当教員がそれぞれの学修内容のプレゼンテーションを行っている。学生たちは各自の希望によって医療、心理、音楽、スポーツ、造形の五つの柱に分かれる。そのグループごとに子どもたちと実際に関わる実践の場を想定して研究発表会の計画を立て、準備を経て活動するのである。その研究発表の場として、毎年10月下旬に開催の大学

祭「東海祭」を予定しているのだが、令和2年度(2020)は新型コロナウイルス感染症予防のため、大学祭が中止になった。翌令和3年度(2021)もコロナ禍は収まらなかったが、2年続けての中止を避けるため、来場者を迎えての通常の大学祭ではなくオンデマンド形式での大学祭を実施することが決定した。

本学科では担当教員で検討の結果、「保育ゼミナールⅠ」としてはオンデマンド形式の大学祭への参加は見送り、令和2年度と同じく代替の授業計画を進めることになった。すなわち、研究発表の場を設けるか否かは各柱に一任し、発表の場を設けた場合もその対象は学生と教職員に限る、という方針である。令和2年度に続いて様々なイベントが中止になり、各種ボランティアに参加する機会がなかなか持てない現状では、実際に子どもたちや保護者の方々と触れ合う機会がなくなる点は非常に残念であった。その一方、10月下旬開催の大学祭に間に合わせるために9月下旬の後期授業開始直後から慌ただしく準備等を行う必要がなくなり、毎週1回、1月初めまで余裕を持った通常の日程で授業を行うことができる点は、柱の担当教員にとってはありがたい面もあったと思われる。

以下、五つの柱ごとに、担当教員による実践報告をお届けする。

## <子ども医療>

### 実施日・会場

令和3年7月16日～令和3年12月8日

東キャンパス図書館3階ラーニングコモンズ

担 当：高岡 光江

参加人数：10名

## ねらい

コロナ感染症拡大にともない大学祭がオンデマンド配信となったため、キッズパークの企画から調べ学習・発表に内容を変更した。

- 1) 英国の先進事例からさまざまな「色」や「かたち」が人に与える影響、それら専門家の活動について知る。（子ども医療学概論の先取り学習）
- 2) ヘルスケアアート、ホスピタルアート等興味・関心のあることを調べ、ポスター形式で発表する。

## 実施内容

子ども医療学概論の授業の一部を先取り学習した後、2人1組に分かれて調べ学習を進めた（表1）。

表1 授業の流れ

授業回	授業日	授業内容
1	7/23（金）	自己紹介、授業の進め方、オリエンテーション（大学祭でのキッズパークの企画・運営）
2	10/13（水）	授業内容の変更について、ペア決め、子ども医療学概論の先取り学習
3	10/20（水）	調べ学習、Google スライドの使い方、
4	11/3（水）	ポスター発表の特徴とポイントにつ
5	11/10（水）	いて
6	11/17（水）	口頭発表：中間発表
7	11/24（水）	調べ学習、全体の構成や一貫性のつ
8	12/1（水）	いて
9	12/8（水）	口頭発表：最終発表
	12/9（木）	ポスター発表（保育ゼミⅠ：音楽分野の発表会場）

### 1. 先取り学習と学生の学び

多様な形と色彩が人に与える影響、専門家の活動について学習した。「英国のヘルスケアアートとマネジメント<sup>1)</sup>」の資料を輪読し、英国で行われているヘルスケアアートの実際とその可能性について考えた。

先取り学習前の段階における病院に対する学生のイメージは、昨年と同様の傾向にあった。色については全員が白色と回答し、病院のイメージについては静か（10名/10名）、怖い（6名/10名）、清潔（4名/10名）の順に多かった。

### 2. 調べ学習

最終目標は保育ゼミⅠの音楽分野の発表会会場にポ

スターを掲示し、他の分野を含め多くの学生・教員に公開することとした。

#### 1) テーマ

先取り学習の内容を踏まえ、興味・関心のある「色」に関するテーマとした。最終的なテーマとスライド枚数を表2に示した。意見がまとまらなかったペアについては、「色」に関係なく興味・関心のあるテーマを調べるよう指導した。

表2 各ペアのテーマとスライド枚数

ペア No	テーマ	枚数（枚）
1	ホスピタルアート	24
2	絵本が子どもに与える効果	15
3	子どものおもちゃと遊び	12
4	グミ	16
5	体が不自由でもできるスポーツ	12

#### 2) 調べ学習の進め方

- ①過去に医療関連科目を受講した学生が作成した口頭発表用スライド（タイトル：世界の子ども病院）を例に、ポスター発表におけるスライドの見せ方とポイントについて概説した。
- ②2人一組のペアワークとし、ペアはくじ引きによって決めた。
- ③円滑な協同学習（ペアワーク）を目指してスライドの作成は「Google スライド」を用いた。3回目の授業で Google スライドの使用方法、スライドの共有方法について概説し、実際にペア間でスライドを共有した。
- ④受講者全員でコミュニケーションが図れるよう各回の授業冒頭に進捗状況を報告する時間を設けた。
- ⑤各回の授業終了後、次回の課題を明らかにするためにリフレクションシートの提出を求めた。
- ⑥口頭発表による中間・最終発表（表1）については、ポスター用に作成した Google スライドを Zoom で画面共有し、発表を試みた。自分たちが伝えたいと思うことを閲覧者に十分に伝わる内容とすることを重視し、スライドの枚数は制限しなかった。
- ⑦口頭での中間発表後、各ペアの良い点と課題（工夫すると良い点）を伝え合った。
- ⑧口頭での最終発表後、各スライドをラミネート加工し、発表会場に掲示した。
- ⑨ポスター発表終了後、最終課題として自由記述のレ

ポート（授業を通じた学び・気づき、授業に対する感想・意見について）を課した。

### 3. 調べ学習と学生の学び

最終発表（ポスター発表）の準備の際に、トラブル（スライドを印刷時にパソコン画面と印刷物との間にずれが生じる）はあったが、全ペアが口頭での中間・最終発表、ポスター発表を実施することができた。スライドのずれの修正、印刷、ラミネート加工、スライドの掲示については、授業時間外に実施した。



自由記述式の最終課題には、一部の学生を除き、「最初は〇〇だったが、最後は△△」のようにネガティブな記述（不安等）の後にポジティブな記述（楽しかった等）がセットで記入されていた。それぞれネガティブな記述とポジティブな記述を表3、表4に整理した。ネガティブな記述として、最初は「話したことのない子ばかりで心配・・・」、や「どうすればいいかわからない時も多々あった」等の記述があった（表3）。

表3 ペアワークに対するネガティブな記述

- ・久しぶりの調べ学習だった(5)
- ・トラブルもあったので、時間までに終わるのか心配だったけど全部のグループ完成させられたのでよかった
- ・最初はクラスも違うため不安だった
- ・話したことない子がペアになりどうなるかとても心配だった
- ・話しかけたら迷惑かなとか嫌に思われると思って話しかけられなかったけど、もっとみんなやペアと話せばよかった
- ・お互いに同じ目的を持ってやっていくためにたくさんコミュニケーションを取る必要があった
- ・最後の授業ではみんなと楽しく話せて自分の考え過ぎだと思ひ後悔している
- ・初めは何の題材でやるのか迷ったし、本当にその題材で深くまで調べられるのか不安だった
- ・初めはどんなふうに進めていくか目的がちゃんと定まっていなくて思ったように進まなかった

- ・どうすればいいかわからない時も多々あった
- ・最後は1人だったけど2人で何を伝えたいのかを決めて完成させることが出来たのでよかった
- ・携帯が使えないのもあり、ペアに任せっきりで迷惑をかけた
- ・テーマからどんなことを皆に伝えるのか悩んだこともあった
- ・高校生ぶりの調べ学習で発表までしたので大変だった

ポジティブな記述として、「ペアの子と協力して何かを成し遂げることがすごく楽しかった」や「ペアにすることで、そのペアの子と仲良くなれたり、他のペアとお互いに意見交換し合ったり、色々な子と仲良くなれるのはすごく楽しい」、「もっと詳しく調べたい」等があった（表4）。

また、ポスター発表後の学びとして、「実際に壁に飾ってみると文字の大きさや色などもう少し工夫した方が良く気づけた」、「実際に眺めてみると、説明部分をもっと簡潔にしたり、画面のサイズも大きくすればより見やすくなると思った」等の記述がみられた（表5）。

表4 ペアワークに対するポジティブな記述

- ・普段話さない子と仲良くなれた、交流できた(5)
- ・みんなで協力して楽しく調べ学習できた(4)
- ・ペアの子と意見を出し合って考えるのが楽しかった(3)
- ・ペアの子とたくさん話し合い、意見を出し合って調べることが楽しかった(3)
- ・深く調べてみると新しい発見があって面白かった(2)
- ・調べ学習をするのがすごく楽しかった(2)
- ・最後のポスターを貼った時にみんなの絆がより深まった(2)
- ・ペアの子と協力して何かを成し遂げることがすごく楽しかった
- ・ペアにすることで、ペアの子と仲良くなれたり、他のペアと意見交換したり、色々な子と仲良くなれるのはすごく楽しい
- ・とてもやりやすい授業で楽しかった！
- ・もっと詳しく調べたいと思った
- ・ペアとかと話し合いながら仲を深めてやれるような時間になった
- ・誰かと何かをこれだけの時間をかけてやること自体がとても久しぶりの感覚で楽しくできた
- ・コミュニケーションを図ることは、改めて大切
- ・今まで知らなかったことがたくさん出てきて、もっと知りたい
- ・ペアの子と意見を出し合ったり他のグループからのアドバイスを取り入れたりして納得のいく物ができた
- ・試行錯誤して完成することができた
- ・また医療ゼミのみんなと一緒に授業受けたい
- ・授業を終えて、ペアと話し合っって調べ学習をすればもっとスムーズに進むってことに気づけた

表５ ポスター発表に関する記述

<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字の量や大きさ、挿絵の量や位置を考えてあった(3)</li> <li>・どのグループも綺麗にわかりやすくまとめた(2)</li> <li>・もっと文字が大きいとパッとみただけでも読みやすい(2)</li> <li>・実際に壁に飾ってみると文字の大きさや色などもう少し工夫した方が良いと気づけた</li> <li>・実際に眺めてみると、説明部分をもっと簡潔にしたり、画面のサイズも大きくすればより見やすくなると思った</li> <li>・飾ってみて、近くで見ている時とは違って見難いところがあった</li> <li>・今まで知らなかったことをたくさん知ることが出来て、面白いなと思った</li> <li>・グループごとに良さがあって、そーやってまとめたんだ！とたくさん良い意見があった</li> <li>・ペアごとにまとめ方が違った</li> <li>・最初に簡単にどんなことを調べたかを提示してから次のところでひとつひとつ詳しくまとめていたり、A・B とかにして比べて良さとかがわかりやすいようになっていたり、今後真似していきたいと思った</li> <li>・文字の色をもう少し工夫した方がいい</li> </ul>
---

その他授業に対する意見として、「授業の始めに皆で自己紹介やコミュニケーションを図る機会があったため、その後の調べ学習もやりやすかった」や「目的や何をするのか全体で理解した上で取り組めて、夢中になって調べたりまとめたりできた」等の意見があった。これら学生の記述より、授業冒頭に全員で行った進捗状況の報告会は、ペアワークに対する不安や戸惑いを払拭し、調べ学習に対する良い刺激となっていたと考えられる。

今回、Google アカウントが使えなかった学生への指導・対応に苦慮した。個別指導により一度はアカウントが使用できるようにはなったが、次の授業で使用できなくなっていた。ペアの学生の負担が大きくなっていったこと、本人の心理的負担も大きかったことが表3より垣間見える。Google アカウントが使えない学生への指導・対応については、今後の検討課題としたい。

コロナ感染症拡大にともない予定していた内容とは異なる授業であったが、与えられた課題に対してペア間で協力しながら、意欲的に学習できていた。今後も学生が夢中になれる、自らの探求心（もっと知りたい）を刺激できるようなペア学習を展開していきたい。

## 引用文献

1. 名古屋ヘルスケア・アートマネジメント推進プロジェクト事務局、英国のヘルスケアアートとマネジメント

2018・2019年度シンポジウムより、ヘルスケアアートそのマネジメントを考える BOOKLET vol.3

## <子ども心理>

### 実施日・会場

令和3年7月16日～令和3年12月8日（10回）

西771教室 東海えほんの森

担当：神谷 かつ江

参加人数：10名

### ねらい

- ・メンバーとの触れ合いを通して、コミュニケーションを形成し、協力・協働の大切さを学ぶ。
- ・表現によるカタルシス効果として、絵本の読み聞かせ、遊戯療法、コラージュ療養を実施する。
- ・自身に関連した心理学のテーマを選び、企画・立案・発表する。

コロナ禍で今年度も大学祭が中止となり、これまで実施されていたキッズパークの開催が中止された。内容を一部変更して実施した。

### 実施内容

内容は3つのねらいに則して紹介する。

ねらい1 メンバーとのふれあいを通して、コミュニケーションを形成し、協力・協働の大切さを学ぶ。

現代は、テクノロジーの発達に伴い、人と人との触れ合う機会が少なくなり、孤立感を抱える人が少なくない。同じクラスであっても、話したことも関わったこともないという学生たちが、意外にも多いので驚くことがある。このようなメンバーに、構成的グループエンカウンターを実施した。エンカウンターとは、エクササイズを通してメンバーと「ふれあい」、ふれあうことを通して本音を表現し合い、それをお互いに認め合う体験である。筆者がファシリテーターとなり、メンバーが簡単におこなえる以下のエクササイズを行った。

#### (1) ウォーミングアップエクササイズ

メンバーが黙って教室を自由に歩きまわる。めったにしないことをするので、何かなあ、おかしいなあ、奇妙だなあなど、様々な感情がわいてくる。お互いにそういう感情の交流を体験しながら、自由に歩き回る。

## (2) 握手をしようエクササイズ

フリーワークが終了したら、歩きながら近くの人と握手する。その時はまず自分の名前を紹介する。「幼児教育学科の東海花子(仮名)です。よろしくお願ひします。」と握手する。相手も同様に返答する。それを全員のひとで行い、肌と肌とのふれあい、挨拶することの気持ちよさを体験する。

## (3) 信頼していますエクササイズ

くじでパートナーを決める。普段話したこともない者同士がパートナーになることもあるが、それを受け入れ、「信頼していますエクササイズ」を行う。

2人1組になって、片方にはアイマスク、相方はマスクなしで手をつなぐ。7号館8階から2号館3階のピアノレッスン室まで、相手の誘導によって往復する。アイマスクをしている人は視界が見えないので、相手に全幅の信頼を寄せることになる。手を離さず、「エレベーターに乗りますよ」「少し段差がありますよ」と声を掛けながら目的地まで歩く。ゴール出来たら、交代する。

## (4) あなたのことが知りたいですエクササイズ

2人1組のペアが、向き合って座る。2人は互いのことを知らないで、質問を通して相手を理解していく。ペアの内1人が相手に質問する。例えば、「好きな食べ物はなんですか」「出身はどこですか」「アルバイトしていますか」「部活に入っていますか」など。答えたくない質問には、「パス」と言えばいい。時間は1人3分くらい。終わったら交代する。質問した内容は、次の「あなたのことを紹介しますエクササイズ」で発表するので、覚えておく。

## (5) あなたのことを紹介しますエクササイズ

先ほどの2人1組が全員合流して、円形に座る。人数が10人と少なかったため、全員参加の円形となったが、人数が多い場合は適宜分割する。10人5組のメンバーに、順番にパートナーを紹介する。1人1分30秒くらいの紹介を目安とする。自分のことに関心を示して、メンバーに紹介してくれた嬉しさは、パートナーへの信頼へとつながっていく。

ねらい2 表現によるカタルシス効果として、絵本の読み聞かせ、遊戯療法、コラージュ療法を実施する

### (1) 絵本の読み聞かせ

エンカウンターエクササイズを通して、メンバーと心の交流が深まったので、場所を図書館に移動した。ほとんどの学生たちは、コロナ禍ということもあり、図書

館を利用したものが少なかった。膨大な数の蔵書を目の当たりにして、学生たちは嬉しそうであった。図書館内を一通り見学した後、えほんの森に場所を移した。色とりどりの絵本の中から、学生たちが読みたい絵本を一冊選び、保育者になったつもりでメンバーに読み聞かせを発表した。選ぶ絵本は、幼少期に保護者から読んでもらった絵本を選ぶ傾向があった。絵本の大きさに合わせて位置を設定し、聞き取りやすい声で適度な抑揚をつけて読んでいた。発表する学生も、聞いている学生も真剣そのものであった。

### (2) 遊戯療法

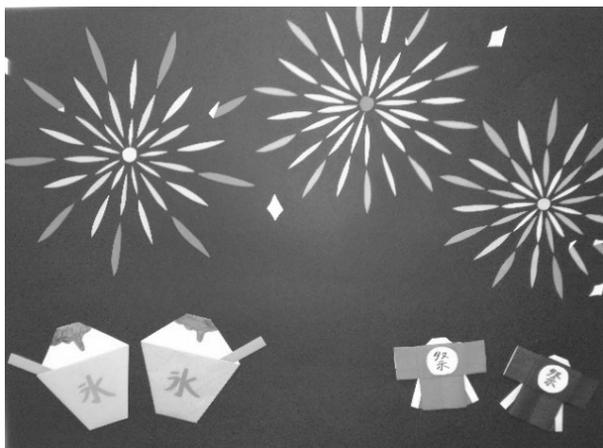
授業が始まると、ウォーミングアップを兼ねて遊戯療法を実施した。遊戯療法は、遊びを通して行う心理療法の1つである。ウノ、トランプ、カルタを採用した。遊びを通して、楽しみながらメンバーと温かい関係を作った。

### (3) コラージュ療法の実施

コラージュとはフランス語の「のりで貼る」という意味に由来し、色紙や雑誌、写真を切り抜き画用紙に貼って作品にする心理療法の1つである。絵画のような上手下手がなく、簡単な方法で自己の内面を自ら振り返るという自己表現が可能である。また、制作することを通して、自らが癒されるという効果も持ち合わせている。



子ども心理では、今年度も「季節を表現しよう」というテーマに決め、1月から12月までの好きな月を学生に選ばせ、コラージュによる自己表現をおこなった。当方で用意したものは、糊と折り紙、A3の画用紙である。学生が用意したものは、ハサミ、雑誌、新聞、広告、写真などであった。制限時間は設けなかったが、完成までには3時間近くの時間を要した。完成したコラージュ作品は、7号館5階の掲示板に掲示した。



ねらい3 自身に関連した心理学のテーマを選び、企画・立案・発表する。

子ども心理では、学生自身が日ごろ興味・関心のある心理学に関連したテーマを選び、企画・立案・発表した。テーマの内容はジャンルを問わず自由。A4用紙2枚程度、イラストを入れたり自分で絵を書いてもよし、引用文献は記載することを約束した。進捗状況を確認、適宜アドバイスをおこなった。

学生たちが選んだテーマは次の通りである。

発表時間は、5分、質疑応答3分の計8分とした。

学生たちが選んだ研究テーマ
睡眠について
瞑想について
なぜ人は緊張するのか
視野狭窄
過眠症について
虚血性心疾患
気管支喘息
心と音楽
HSP(Highly Sensitive)

## 考察

現代は科学技術の著しい発展のおかげで、快適で便利な世の中になった。ほしいものは、パソコンからワンクリックするだけで、数日後には自宅に届けられる。その便利さと反比例するように、生身の人間と触れ合う機会が少なく、人と人との関係が希薄になっていることは否めない。同じクラスであっても、挨拶をすることも話したこともない学生たちが、意外にも多いのである。関わろうとしないので、人間関係が広がらない。そのようなメンバーに、構成的グループエンカウンターを実施した。

エンカウンターという言葉は「出会い」という意味であり、自己と他者との深くて親密な出会いを指している。ふれあいを通して、本音で表現し合い、それをお互いに認め合う体験のことである。今回のメンバーの中にも、自分から壁を作ってコミュニケーションを取ろうとしない学生がみられた。そのような学生にエンカウンターを実施し、用意したエクササイズを一緒に行ってもらい、ふれあうことの温かさを実感してもらった。最初は緊張していたが、回を重ねるごとに、リラックスした様子で、笑顔を見せるようになった。しかしながら、自分から積極的に話しかけ、コミュニケーションを形成する姿は、最後までみられなかった。

授業開始時に導入した遊戯療法は、言語発達が未熟な子どもを対象とした心理療法であるが、大学生にも適用可能である。遊びを通して自分を表現するので、心理的な問題の解決につながるとされている。子ども心理ではウノ、トランプ、カルタを採用した。ゲームを取り入れることで、心の緊張状態を緩和し、リラックスさせる効果があった。声を出しながらゲームを行うので、内気な人でも自然と声のでるので、表現療法としても有効である。トランプ遊びでは4人1組になって、ババ抜き・七並べ・神経衰弱をおこなった。かるた遊びでは、じゃんけんで読み手を選出し、「ことわざかるた」、「日本と世界の名作おはなしかるた」を遊びながら楽しく学んだ。

えほんの森での絵本の読み聞かせは、恵まれた環境の中での発表なので、学生たちも心地よさそうであった。発表者は、絵本の見やすさや声の速さ、トーンに気を配っていた。全員が保育士になりきって読み聞かせを行うので、発表する学生も聞いている学生も真剣そのものであった。

コラージュ療法は、雑誌や広告、折り紙などを切り抜き自由に貼っていくので、描画のような上手下手という評価が伴わないので、メンバーにも抵抗なく実施できた。そもそも人は、心の内にあるものを何らかの形で表現したいという思いがあるという。それはコラージュに限らず、箱庭療法でも絵画療法でも同様だといえる。また作品には自分の無意識が投影されるため、完成作品を自ら味わうことは、心の癒しにつながると考えられている。メンバーたちは、自らの作品を鑑賞しながらさまざまな思いを描いているようであった。

研究発表では、メンバーが日ごろ気になっていたテーマを選び究明した。今回の発表では、視野狭窄、過眠症、虚血性心疾患など、病気に関するものが多かった。理由を尋ねると自身が抱えている持病とのことであった。例

えば「過眠症」を選んだ学生は、十分に眠っているにも関わらず、日中に強い眠気が生じて起きているのがつらいという。ナルコレプシーと診断され、中学時代に発症したとのことであった。

学生たちが選んだテーマは、実際の自分の経験を取り入れて発表するものが多く、根拠や対処法を明示するので、説得力があった。選ぶテーマは身近なものだが、当たり前の日常を掘り下げて研究するので、共感を得られるものが多かった。

今回の保育ゼミナールⅠは、昨年度同様、コロナ禍で学園祭が中止となり、キッズパークが開催できなかった。内容もやむなく変更となったが、表現によるカタルシス効果として、えほんの森での読み聞かせや遊戯療法、カラーージュ療法等を通して、「メンバーとのふれあいを通してコミュニケーションを形成し、協力・協同の大切さを学ぶ」というねらいは達成できたようである。授業後に記入してもらった授業評価もおおむね良好な評価をいただいた。今後はコロナと共存・共生しながら、実践的力量を有する保育者としての資質の形成をさらにめざしていきたい。

## <子ども音楽>

### 実施日・会場

令和3年10月13日～令和3年12月8日（8回）

西134教室

担当：内田 恵美子

参加人数：19名

活動名：「子どもたちと音楽を楽しむ」

### 1. 「音楽」の授業概要とねらい

毎年「保育ゼミナールⅠ（音楽）」（以下「音楽」）では、本学で開催される大学祭において、遊びを通して音楽が学べる場を設けており、毎年多くの子どもたちと手作り楽器の制作や手遊びで一緒に遊ぶなど、音楽を通して様々な遊びを行っている。

保育ゼミナールⅠ履修の全学生には、活動を具体的にイメージし易いよう過去の保育ゼミナールⅠ「音楽」の活動内容を紹介し、本年度の「音楽」のねらいは「主体的・協同的に実践する」であり、活動内容や遊びの方法に対して主体性を持ちながら協同的に進めることができる学生を募ることを説明し、結果本年度は19名の学生が「音楽」を選択した。

活動内容の決定は、選択した学生には、音楽を通して

子どもたちと遊ぶ活動内容を各自考えてもらいアンケート調査をした（複数回答可）。授業でアンケート結果を匿名で公表してそれをもとに活動内容を決める話し合いをした。新型コロナウイルス感染防止の観点から本年度の大学祭が遠隔での開催となったことによって直接子どもたちと一緒に遊ぶ場が持てないこととなり子ども対象ではなく学内対象での活動となった。

全員での話し合いの末、学生たちのアンケート結果を擦り合わせ、合奏、合唱、ダンスを組み合わせたコンサート、「ディズニー ミュージカルコンサート」とし、選曲も学生主体で行った。

### 2. 合奏

演奏は通常既存の合奏用の楽譜を使用することになるが、楽譜の指定する楽器を保有していないことや、演奏する場所によって使用が難しい楽器があること、人数など、様々な理由によって既存の楽譜をそのまま使用できない場合が多い。その場合は代替りの楽器を使用したり楽譜を編曲したりするなど様々な工夫をしていく必要がある。この問題は保育の場でも大いに起こりえる問題で、保育者となる学生にはそういった場面でどのように対処するかを学ぶ場にもなったであろう。

今回の場合ハンドベル経験者が多くいたためハンドベルを取り入れた合奏にした。しかし選曲した曲でハンドベルを伴う器楽合奏の楽譜がないため合奏楽譜のコードネームからハンドベルの音を取り出すこととし、ハンドベル担当学生らはコードを読み取りながら楽譜に記譜していき、学生同士で音を直しながら工夫して練習を進めていく姿が見られた。

合奏の技術面では、個々の演奏技術と楽器を合わせて演奏するという2つの技術が必要である。楽器を合わせて演奏するには、速度を合わせることと音量をバランス整えていくことが重要であるが、各々が担当する楽器がある程度正しく演奏できるようになることによって速度調節や強弱の調整もできるようになる。楽器は主に打楽器であったがそれぞれの打楽器の様々な打法を学習して速度と強弱の調整ができるよう練習を進めた。各々の練習の後合奏へと進めたが、速度と強弱の調整は筆者が指揮者となって指導した。その際には、保育者となる学生が指導法を学習できるよう、個々への助言を学生全員に周知できるよう配慮して指導した。

### 3. 合唱

事前アンケートによるとミュージカルを希望する学生が多くいたためミュージカル作品を合唱することにした。合唱の楽譜も合奏の楽譜同様にそのまま演奏することは難しく、本来3部合唱での編曲の楽譜だったため声部を減らしたり単旋律にしたりと、適宜変更しながら進めていった。また、それぞれの声部だけを歌ったものを録音して自主練習ができるようにし、短い期間に仕上げたいけるよう工夫をして進めた。

### 4. 演出

ミュージカルの要素をコンサートに取り入れるためダンスを行うことも考えたが、新型コロナウイルス感染防止の観点からダンスではない身体表現を取り入れることとし、手話での身体表現を行うことにした。また、服装や装飾などは学生主体で決めていった。

### 5. 発表

コンサート実施日：12月9日(木)12:50～13:05

会場：西541教室



図1 コンサートの案内



図2 コンサートの様子

### 6. 振り返り

#### (1) 学生の記述

最後の授業では「音楽」の感想を記述した。成績には影響しないことを伝え自由記述とした。学生の記述文からキーワードを取り出した結果、①他者とのかかわり②知識と技能③音楽の楽しさ④達成感、以上の4つのキーワードを抜き出すことができた。さらに抜き出したキーワードに関する記述を記述内容によって分類した。

#### ①他者とのかかわりに関する記述

協力して作り上げる	みんなで何かに取り組む楽しさを知った／仲間と協力する楽しさを知った／一つの物を作り上げる楽しさを知った／仲間と作り上げる楽しさを知った／みんなと作り上げる楽しさを知った／たくさんの人と一緒に一つの物を作り上げる楽しさ／みんなで良いものを作り上げていく過程の楽しさ／大勢で一つの物を作り上げる素晴らしさを知った／仲間との協力の大切さ／みんなで作り上げていく大切さを知った
コミュニケーション	お互いに意見を言い合うことの大切さ／お互いに意見を出したり励まし合ったりする姿がたくさん見られ大切だと思った／お互いに良くなるために意見を言い合う大切さを知った／仲間との協力や意見を交わす大切さ／知らない学生とのコミュニケーション／まわりをよく見て合わせることの大切さ／友だちではない人と一緒に作り上げるためにコミュニケーションをするのが大切なことだと感じた

#### ②知識と技能に関する記述

演奏の知識・技能	楽器が上達した／練習をする課程で上達が感じられ学びになった／何度も繰り返し練習することで上達を感じられた／楽器の鳴らし方によっていろんな音が出せることを学んだ／楽器にふれることが多いと思うので良い機会だった／他人の演奏を聴いて、楽器の演奏の工夫を知ることができた
発表の知識	選曲の仕方を学んだ／どうやったらいい演奏を作れるか考える機会になった

保育者として	発表に至るまでの取り組み仕方について学べた／園で発表会がある場合取り入れられる／園で合奏をする場合楽器の知識やパートの割方について学べた／発表会を体験することができた
--------	---

### ③音楽の楽しさに関する記述

保育者として	子どもたちにも音楽を楽しいあそびとして取り入れたい／合奏の楽しさを子ども達とも共感したい／子ども達と楽しめる曲を知った／一緒に作り上げる楽しさを伝えたい／音楽は楽しいということを伝えたい
楽しむ	音楽のたのしき／音楽の楽しさを知った／合奏の楽しさ
協同性	仲間と一緒に何かをすることが楽しい／みんなで協力して完成に近づけていく楽しさ／仲間と音楽をすることの楽しさ／協力して何かを作り上げる楽しさ

### ④達成感に関する記述

協力する	みんなでやった達成感／団結して取り組んだ達成感／仲間と作り上げた達成感／協力して完成させた達成感
完成させる	最後までやりきる大切さ／達成感／頑張ったからこそ得られる達成感／完成した達成感／完成させる達成感／達成感を感じた

## (2) 振り返りの考察

最も多かったのは「他者とのかかわり」に関する記述でその内容は二つに分類することができた。一つ目は協力して作り上げることについて、二つ目は他者とのコミュニケーションについてである。一つ目については、仲間と取り組んで作り上げる楽しさや大切さ、素晴らしさを感じたなど、協力して作り上げることについて記述している。二つ目ではお互いに意見を言うことの大切さや他者に合わせることの大切さについての気付きが見られる。

次に「知識と技能」に関する記述でありその内容は、演奏の知識・技能の学び、発表に関する知識の学び、保育者として学びという3つに視点からの知識・技能について記述されていた。楽器演奏の知識・技能だけではなく、保育の場を想定した園での発表にいかせるという視点からの感想が多く見られるのが分かる。

「音楽の楽しさ」に関する記述の中で最も多いのが、子どもたちと音楽の楽しさを共有したいという保育の場を想定しての記述であった。他には学生自らが音楽を楽しめたことや、協同することの楽しさについて記述していた。

「達成感」についての記述では、完成させた達成感と協同による達成感について記述していた。

## 7. まとめ

授業の振り返り記述では、「他者とのかかわり」に関する記述が最も多く、学生同士で協同的に進めることやコミュニケーションの重要性について記述している。授業での学生の姿にも学生同士で音を直しながら工夫して練習を進めていく姿や学生同士が教え合ったり励まし合ったり姿が多くみられた。本授業「音楽」の到達目標のひとつである協同的な活動ということに対し、多くの学生が達成できたといえる。

また、他者の演奏を聴いて学ぶことや、意見を言い合いながら作り上げていくことの重要性、さらに保育者としての視点からの記述など、様々な角度から主体的な活動の記述が多く見られた。授業においても、演出を学生主体で相談し合う姿や自主練習をする姿など多くの主体的活動が見られたことから、もう一つの活動目標である主体的活動ということも多くの学生が主体性を持ちながら活動できていたのではないだろうか。

## <子どもスポーツ>

### 実施日・会場

令和3年9月～令和3年12月16日(11回)

東海学院大学西キャンパス西体育館

担 当：生島 嘉人

参加人数：6人

活 動 名：身体活動表現

### ねらい

#### 器械体操による身体表現を学ぶ

子どもが成長するうえで、身体を動かすということはとても重要と考える。ところが、ここ数年は子どもの体力と運動能力の低下が問題視されている。乳幼児期の身体の発達と成長はとても著しいもの。この時期から体操で身体を動かし、成長発達を促していくことはとても重要であり、体操は身体能力向上のイメージが強く、敬遠されがちだが、体操は幼児期の発達段階に様々な良い効果をもたらす。

## 体操がもたらす５つの効果

### １．運動能力・体力アップ

体力は人が生きていくのに欠かせない重要なもの。体操によって体力が向上することで健康を維持できるのはもちろん、意欲や気力といった精神面も安定する。

また、体操は運動能力アップにもつながる。その場に適した動きや力の入れ方など、運動を調整する能力が備わる。これにより怪我を防止できたり、今までできなかった動きを習得する助けにもなる。

### ２．丈夫な身体

体操をすると、丈夫でバランスの良い身体が作られる。風邪をひきづらくなるなど、健康に良い影響をもたらす。

### ３．心の育ち

十分に身体を動かすことは心の育ちにもつながる。様々なことに挑戦するので、気持ちが強くなる。成功体験を重ねて自信が持てるようになり、自己肯定感が育まれる。

### ４．コミュニケーション能力アップ

体操を通して、友だちと触れ合いながら身体を動かすことで、コミュニケーション能力も磨かれる。また、集団行動によって協調性や社会性が身につく。

### ５．認知的能力アップ

体操する間はずっと脳の領域を多く使用している。また、状況に合わせた判断を素早くできるようにもなり、運動制御機能や知的機能の発達が促される。

## １．授業内容

### テーマ 『器械体操』

#### 授業の概要

この科目では身体を動かす楽しさを体験し、保育者として、援助指導ができるように自身の運動に対する資質の向上を図る。

そのために、様々な身体操作の方法を実践し、習得することで、運動の段階的な指導法を学ぶ。また、表現運動についての知識・理解を深め、実践するとともに、その指導の方法についても学習する。

更に習得した表現運動の技術を用いて、作品の創作活動を行うことで、思考力・想像力を高める。

#### 学習到達目標

この科目では、保育者として子どもの発育・発達に応じた表現運動を発想する思考力・創造性を高めるとともに、身体表現指導の実践力を身につけることを学習到達目標とする。

## 評価基準

取り組む姿勢（40点）、表現力（30点）、チーム力（20点）、自己評価（10点）とする。

## 発表日

2021年12月8日（水）

## 発表場所

東海学院大学東キャンパス東体育館

## ２．体操の種類と特徴

ひとえに体操教室といっても、種類はさまざまだが、主に、【体育】【器械体操】【新体操】に分かれる。それぞれの特徴を紹介する。

### ①体育

体育は、マット運動や跳び箱、縄跳びやストレッチ、トランポリンなどの主に基礎体力を作ることに重きを置いている。幼児から実施できるものも多く、ゲーム遊びを含めた内容も多い。また、一対一ではなく集団で行うため、集団生活に必要な約束を守ることや、生活習慣に必要なマナーを身につけることができる。

### ②器械体操

器械体操は、平均台や鉄棒、平行棒などの器械を使って行う体操。競うポイントは美しさや安定度、ダイナミックさ。反射神経や動体視力を養うことができる。幼児期に始める場合は、最初から器械を使うのではなく、跳び箱や平均台、マット運動などを通して学んでいき、段階を踏んで徐々にできることが増えていく。

### ③新体操

新体操は、フープやリボン、ボールなどの手具を使って、音楽に合わせて体操を行うもの。技の難易度以外にも、ジャンプ、投げた手具を取る事、回転などの美しさや表現力も評価の対象となり、スピードや瞬発力も求められる。

### 体操の行うことによるメリットとは

次に、体操を行うメリットは何があるのか。

元体操日本代表選手の田中光さんは、体操が子どもの発育に与える影響を以下のように話している。

『小さいころから体操を習うことによって、脳が動きの司令を出して神経系を伝達させ身体をコントロールする「神経系のトレーニング」につながります。なおかつ、全身を動かしているということで、細かい筋肉や大きな筋肉をまんべんなく使うことになりやすいため、体操は子どもの身体の発達に非常にいいわけです』。全身運

動である体操をすることによって、子どもたちの運動神経が発達する。また、このほかにも以下のようなメリットがあるとされている。

- ・体が丈夫になる
- ・寝つきが良くなる
- ・ストレス解消になる
- ・リズム感や表現力が身につく（新体操）
- ・姿勢が良くなる
- ・礼儀正しさが身につく
- ・体育の授業に役立つ

そして、挑戦する勇気を持ち、目的を達成したときの喜びを感じることもできる。常に自分と戦うことでメンタル面も強くなると考えられる。

### 3. 講義の実際

女子学生 A さん（19 歳）の練習内容

将来の目標：保育士および幼稚園教諭

運動経験：バレーボール部所属（6 年間）

体操スキル：マット運動経験あり（前転、後転、側転）

チャレンジ目標：トランポリンを使った前方宙返り

練習内容

- ①マットにて前転のスキルアップを行う。
- ②マットにて飛び込み前転を行う。
- ③トランポリンとマットを使用して飛び込み前転を行う。
- ④セフティーマット（ウレタンマット）を使用し、高所から落下運動を行う。
- ⑤セフティーマット（ウレタンマット）を使用し、高所から前転落下を行う。
- ⑥トランポリンとセフティーマット（ウレタンマット）を使用し飛び込み前転を行う。
- ⑦トランポリンとセフティーマット（ウレタンマット）を使用し飛び上がり、背中から着地を行う。
- ⑧トランポリンとセフティーマット（ウレタンマット）を使用し飛び上がり、回転を意識して、身体を丸めて背中から着地を行う。
- ⑨トランポリンとセフティーマット（ウレタンマット）を使用し飛び上がり、回転を意識して、身体を丸め、お尻から着地を行う。
- ⑩トランポリンとセフティーマット（ウレタンマット）を使用し飛び上がり、回転を意識して、身体を丸め、足から着地を行う。



結果：段階を踏んで、できる内容から実施することで、目標を達成することができた。

### 3. まとめとして

今回の器械体操は保育士、幼稚園教諭を目指す学生に向け「保育ゼミナールⅠ」の授業として行った。

今回の授業で「チャレンジ」することで以下のような効果が得られた。

- ・出来なかった技が初めて出来た時の嬉しさ、喜び。
- ・練習した分、考えた分だけ自分の経験となる。
- ・運動をすれば身体だけではなく脳にも影響を与える。

子どもの運動能力低下問題は、ただ運動が苦手な子が増えているという事だけが問題ではなく、元気に遊んで体を動かすことは、体だけではなく脳や心にも大きな影響があると考える。

先行研究により、運動することで脳が活性化されるというデータも存在しており、これは神経伝達物質の伝達がスムーズになると考察される。

普段から元気に走り回っている子どもは、チャレンジ精神旺盛なタイプが多い印象がある。既存の性格の影響も大きいですが、運動で脳が活性化したことにより、物事に対する考え方や受け止め方が前向きになったとも考えられる。

また、運動が心に与える影響で見れば、ストレスを軽減させる効果も考えられる。経験があると思うが、休日にスポーツをすると、人にもよるが高揚感を感じる人が多い。

身体を動かすことで脳が活性化されるといふと、脳の運動を司る部分が活性化されると想像するが、この運動を司る部分と感情を司る部分が同じであるため、運動のほかに、知能や感情を司る部分も活性化されるとの研究結果もある。

今回のゼミ授業においても運動を行うと、効果として脳が活性化しチャレンジ精神旺盛になり、ストレスがなくなって自制心が育ったと考えられる。子どもにとって運動がどれほど大切なものか、学生は今回の授業で自ら経験することで認識できたと考える。

しかし指導において注意すべきことは、子どもそれぞれに個人差があるということを認識しておき、運動が得意な子と比べるようなことをせず、子どもがその子なりにどれだけ成長できるかということ、そしてなにより子どもが運動を好きになることを指導目標にすることが重要と考える。

## 引用文献

1. 元・体操日本代表選手に聞いた「体操が子どもの身体の発育にいい理由」こどもまなび☆ラボ  
<https://kodomo-manabi-labo.net/hikarutanaka-taisouhatsuiku>（最終アクセス 2022/06/22）

## <子ども造形>

### 実施日・会場

令和3年7月16日～令和3年12月4日

西511教室

担当：浅野 秀男

参加人数：18名

活動名：私のシルバニアハウス

### ねらい

保育ゼミナールⅠの子ども造形は、例年グループ制作をしてきたが、本年度は参加人数も多いこともあり、個人制作を行った。昨年はジオラマ制作を行ったが、学生たちに数理的な正確さや作業的確さを望んだ為に、制作作業に意識が集中しすぎたように感じていた。そうした反省から、今回は、学生各自が楽しんで制作できるようにシルバニアハウスをモチーフにして、特にインテリアに各自の楽しいアイデアを期待し、ねらいとした。



「シルバニア森のお家」（モチーフ）

### 制作手順と材料

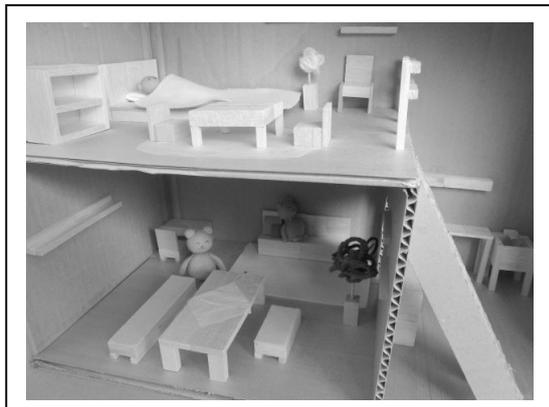
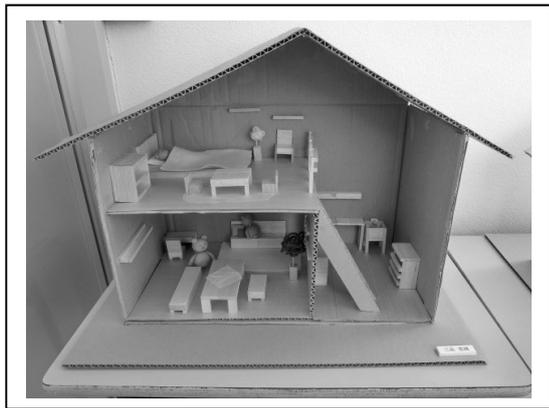
材料としては、段ボール箱・バルサ材・紙粘土・フェルト・色画用紙・色紙を使用した、各自のアイデアで、持参するものは可とした。制作手順は、まず既成の段ボール箱を選択し1面を切り取り、屋根を付ける。外壁は色画用紙を貼り付け装飾をした。内装の制作がねらいであるため、外装は均一の方法とした。

### 造形作品の評価について

学生から「私、頑張ったからAを下さい」という言葉を聞く。その時には私は「頑張るのは当たり前」と答えて置くことにしている。こうした学生の言葉には多分に自己中心的な思いや甘えが感じられるが、造形作品の評価の特性が表れている。

作品は、作者の主体的なイメージやメッセージを持っている。こうしたイメージやメッセージは相対的に評価することは厳密には不可能である。ただ作品の技能や技術、構成や色彩センス、形態センスといったものは、相対評価はある程度可能である。造形評価はそういった要素を、バランスを取りながら、評価する側の感性と経験で評価している。

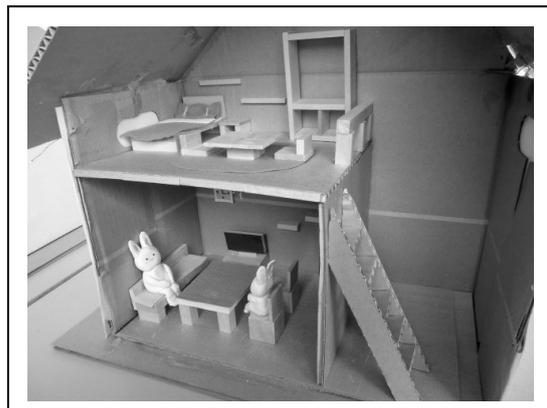
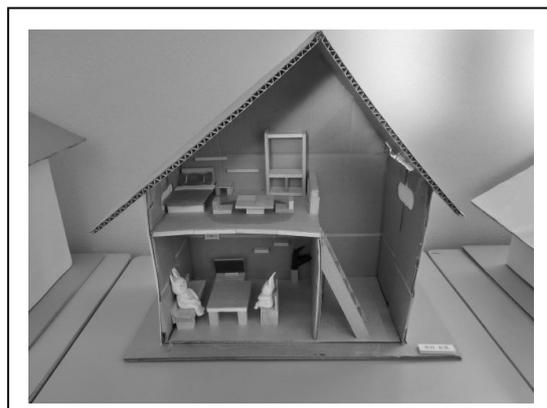
### 学生作品と評価コメント



学生 M の作品

まずはまとまりの良い作品である。細部まで丁寧な作業がしてあり、全体としてはきれいな印象を受ける。

内装は、少し左に寄った感があるが、美しいと思われる。欲を言えば色彩に乏しく、カーテン、絨毯等、色付けがあれば、印象がかなり違ってくるのではないだろうか。



学生 Y の作品

この作品もよくまとまっている作品である。人物（擬人化）も配置され、生活感が感じられる。前作品同様、各作業が丁寧にされており好印象である。

これも前作品と同様、左に寄っているが右の壁に何かアイデアが欲しい気がする。色彩に乏しいと感じる。

ここまでの2作品は、モチーフをよく消化している作品である。作業も丁寧で、よくまとまっているが、個性的なアイデア、発想は見られない。この作品あたりが評価の平均値と設定した。





学生Ⅰの作品

全体は黒で統一されている。二階には吸血鬼の棺桶のようなものが配され、イメージとしてはかなりダークなものを表現している。一つ一つの物も、かなり手が込んでいる。イメージやメッセージが明快で、モチーフを自分のイメージでアレンジしているところは、非常に評価できる。構成の対称性と非対称性がうまく配置されている。前２作品とは考え方として対照的な作品である。

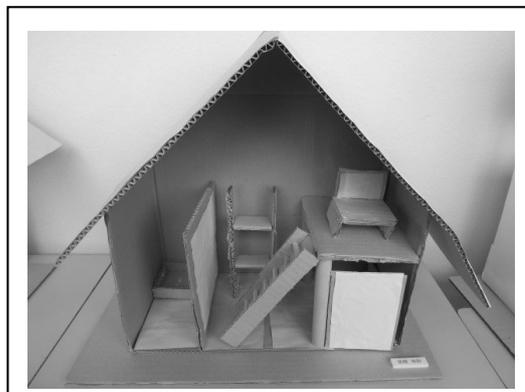
### 内装に拘った作品



学生Ⅰの作品

カーテン、床、ソファ、ベット等、内装に拘り、現実感のある作品になっている。家そのものは完成度が低いですが、内装には他の学生の作品には見られない拘りがあり評価できる。造形、色彩センスの良さを感じる。

### 夢中になって作った作品



学生Ⅱの作品

作品としては特に優れているわけではない。個々の作業も正確にできてはいないし、むしろ粗い作業がしてある作品である。ただ制作中の様子や会話では非常に楽しそうだったので、夢中になって制作していた。造形は非常に好きだと話していた。幾分能力的には劣っているのだが、制作態度や様子が印象的で、好感が持てる。造形的な評価ではないが教育的には評価してもいいのでは考えている。

### 全体として

授業としては、ほぼ欠席もなく、各学生が積極的に制作していたと思われる。各自が計画したプランを達成することは、時間制限の中で難しかったようである。今回の作品制作に限らず、発想やアイデアの画一化がみられるように感じられるが、学生の微妙な変化を考えながら今後の課題や、方法を考える必要があるように思う。

### おわりに

以上、医療、心理、音楽、スポーツ、造形の順に令和3年度「保育ゼミナールⅠ」の実践活動を報告した。いまだ収まらないコロナ禍ゆえに、大学祭を地域の親子と実際に接する研究発表の場とすることはかなわなかったが、受講生にとって柱ごとの分野の学修に主体的に取り組み、学びを深める機会となったことを願ってやまない。

“Children Seminar I” Practical  
Report (2)

KIDO Kuniko, TAKAOKA Mitsue,  
KAMIYA Katsue, UCHIDA Emiko,  
IKUSHIMA Yoshito and ASANO Hideo